少し難しい話かもしれませんが、とても大切な事ですね。3つ目に出てくる「機器を使ったコミュニケーションが発語を妨げる」ですが、実際サンフェイスでも統計をとった事があります。半年ほどで明らかに発語が増えました。やはりここで重要なのは「双方向のコミュニケーションシステム」ですね。
一歩通行ではコミュニケーションとは言えませんもんねぇ・・・　久田

第 59 回『わかるように伝えていますか』

香川大学　坂井　聡

なぜ、コミュニケーション手段の確保が遅れるのか？

今回は、コミュニケーション手段の確保が遅れる理由について考えてみたいと思います。これまでの重度の表出障がいのある人のコミュニケーション手段の確保については、早期発見、早期療育を背景にして、その人の「障がい」に焦点が当てられ、その結果、訓練等を実施して、「障がい」そのものを克服し、改善するという発想が強かったのではないでしょうか。当然、子どもの障がいが明らかになると、障がいの側面に視点が当てられ、何とかその障がいを無くさなければ将来が大変だということを考えてしまうからです。これをコミュニケーション障がいという点から見てみると、次のような背景が考えられるのではないかと思います。

ひとつは、コミュニケーション手段を提案し指導できるスタッフの不足です。コミュニケーションをまず確保という考え方がこれまでまだなかったために、コミュニケーション能力を伸ばすことを専門にするスタッフがいないということです。加えて、コミュニケーションエイド等に代表されるようなコミュニケーション手段を使ったコミュニケーション支援が日本で紹介されてまだ歴史も浅いということも専門家が養成されていない理由だと考えられます。言語聴覚士が主として言語に関する訓練を行うようになっていますが、言語聴覚士すべてが、AAC という考え方に基づいた、コミュニケーション手段を確保するような知識と技能を持っているかというとそのようにはなっていないのです。これが、取り組みを躊躇させる原因の一つと考えられます。

二つ目は、障がいのある子どもの場合、コミュニケーション訓練に比べて、身体的、医療的な介入に焦点が当てられることが多く、コミュニケーション支援について、その導入を考える機会がないという現実です。医学的な側面や生活するうえで必要とされる日常生活動作などが重要視されることが多く、コミュニケーションの視点は乏しいように思われます。これは、専門家のみならず家族や周囲で関わる人たちも考えておかなければならないことです。「〇〇もできないのにえらそうなことは言わない」などと言って、訓練を重視していることってあるのではないでしょうか。ここがかわらないと、あえてコミュニケーションというようにはならないのだと思います。

三つ目は、コミュニケーションエイド等の導入が、音声表出の発達を妨げるのではないかという誤解です。安易に機器等を使ってコミュニケーションできるようにしてしまうと、出るはずの音声が出なくなってしまうのではないかと考えてしまう人が多いということがあげられるのです。しかし、この見解に対しては、子どもたちにとって双方向のコミュニケーション・システムが利用可能な状態であるならば、コミュニケーションエイド等の導入も音声言語表出の発達を促進するという主張もあるのです（シルバーマン、1995)。コミュニケーションエイドの導入が音声を消失させたという研究結果は、私の知る限りでは見たことがありません。

このような三つの理由が、コミュニケーション障がいをもちながらも、今使うことができる能力とテクノロジーの力で、コミュニケーション能力を最大限に発揮し、今の生活を創っていくというような発想を妨げていたと考えられるのです。

このままでは、コミュニケーションが確保されないまま成長していくことになります。何とかしないといけないのではと思います。

坂井聡先生の紹介

（プロフィール）
香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞
（著書）
暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など